書評

小林　寧子『インドネシア　展開するイスラーム』名古屋大学出版会，467p，2008年.

東南アジアを観察するにあたって，イスラームが単なる表層ではなく，さまざまな社会制度，人々の思考や世界観を形成する基層の（少なくとも）重要な一部を形成しているという認識は近年高まっているように思われる。それは多分に，20世紀後半から顕在化してきたイスラーム復興現象を目の当たりにして，研究者が後追い的に認識を改めている過程ともいえるだろう。したがって，東南アジアのイスラーム研究が厚みを増してきた現在においても，著者のようにイスラーム法を中心としたイスラームの諸制度，植民地期の行政制度を丹念に調査してきた研究者は希有な存在である。本書は著者がこの20年あまり発表してきた研究成果を加筆のうえ収録した待望の一冊である。

本書の目的は「外来宗教であるイスラームがインドネシアに根を下ろし『再生』されていくメカニズムを明らかにすること」（iiiページ）であり，「地域の総合的把握と，その地域の固有性を明らかにすることをめざすが，何よりも地域の住民の主体性を重視する」（iiiページ）地域研究の手法に依拠している。「当初は大きな物語を想定して書かれたものではなかった」（ivページ）というが，それぞれの論文は加筆され，書き下ろしが挿入されているので違和感なく全体を通して読むことができる。

本書の構成は以下のとおりである。

序　章　イスラーム地域研究の方法――インドネシア・イスラームの実像を求めて
第Ⅰ部　植民地期ジャワのイスラーム――イスラーム法浸透のメカニズム
　第1章　言語から見たジャワのイスラーム受容
　第2章　プサントレンとキタブ
　第3章　プンフルと宗教行政
　第4章　イスラーム法裁判所の確立――多元的司法制度の成立
　第5章　20世紀のウラマー，ウマット，ウマラ
第Ⅱ部　現代インドネシアのイスラーム――イスラーム法の解釈と再解釈
　第6章　独立インドネシアの政治とイスラーム
　第7章　イスラーム法体制と家族法問題
　第8章　イスラーム法学議論の展開
　第9章　「公的ファトワ」とウマット――ウラマー評議会をめぐって
　第10章　暮らしの中のイスラーム法――ナフダトゥル・ウラマーの法学決定集から
終　章　インドネシア・イスラームの展望

序章では簡単にインドネシアのイスラームを対象とする既存研究がレビューされたあと，「イスラーム地域研究の基本」と題してイスラーム法，イスラーム制度（法廷，ザカート［喜捨］や巡礼などを管理する公的機関），ウラマー（イスラーム諸学を修めた学者，知識人）・ウマット（ウンマ，宗教共同体）・ウマラ（政府）の三者関係，広いイスラーム世界との連動性の5つの共通軸を提起している。さらにインドネシアのイスラーム研究において議論の的となってきた，イスラームとアダット（イスラーム化以前に実践されていた慣習），サントリとアバンガン，近代派と伝統派といった二項対立的な類型化の問題点を指摘している。

第Ⅰ部はオランダ植民地支配から日本軍政に至る19世紀から20世紀前半のジャワにおける言語，教育，国家の行政制度を検討し，多面的なイスラーム化の過程を明らかにしている。第1章はジャワ語およびインドネシア語に見られるアラビア語とペルシャ語からの借用語の浸透を通して，インドネシアにおけるイスラーム受容の深さと広さを指摘している。第2章はオランダ語文献を用いて19世紀におけるイスラーム教育を描いた。とくにオランダ植民地政府の調査記録（『グル登記簿』）の記述から，プサントレン（寄宿制のイスラーム教育機関）の教育内容や生徒の出身地などを項目別に再構成している。第3章は宗教官吏プンフルの歴史的変遷を辿ったうえで，オランダ植民地下の宗教行政の特徴と「問題点」を指摘している。第4章はイスラーム法裁判所の発展と制度化の過程，オランダ植民地支配下の司法制度を詳細に検討している。第5章は，19世紀末以降に「ウラマー，ウマット，ウマラ」の関係を大きく変動させたイスラームの政治的な組織化について検討し，第Ⅰ部を締めくくっている。20世紀初頭

に活躍した4人のウラマーを紹介した上で，イスラーム同盟，ムハマディヤ，ナフダトゥル・ウラマーなどの団体設立による近代的な組織化を民族運動とは別次元の「ウマットの台頭」と捉え，これら宗教性を帯びた指導層と日本軍政というウマラとの関係を明らかにしている。

第Ⅱ部は現代インドネシアにおけるイスラームについて，主として法的な制度化に焦点を当てている。書き下ろしの第6章は独立からスハルト体制期，民主化期までの政治とイスラームの関連について概観し，第Ⅱ部の見通しを良くしている。第7章はインドネシアの法体系におけるイスラーム法の位置づけを示した上で，婚姻法の法制化とその変革をめぐる議論を紹介している。実定法ではないが裁判官によって参照されている「イスラーム法集成（KHI）」と男女平等原則に基づく「KHI 対案」をめぐる議論が焦点となっている。第8章は「KHI 対案」の背景となった，ナフダトゥル・ウラマーを中心とした革新的な法解釈の方法論の変遷を検討している。第9章では日常生活の諸問題に対するウラマーのファトワ（法的見解）について検討している。インドネシアにおいてファトワが誰によってどのように出されて来たのかを歴史的に概観したあと，スハルト体制期に設立された半政府機関であるウラマー評議会（MUI）とその後の変化について，主として「味の素事件」を題材に明らかにしている。第10章は植民地期から現代までのナフダトゥル・ウラマーの法学決定集を用いて，ウマットの日常生活においてどのような事柄が問題とされ，ウラマーがどのように解答していたのか，分野別に整理をした上で，その時代的な変遷を明らかにしている。

植民地期インドネシアの宗教行政，教育，イスラーム法制度，さらに現代のインドネシアにおけるイスラーム法制度とその変革，背景にある法学議論の展開までを体系的に扱った本書は資料的な価値が非常に高い。オランダ語資料から植民地期のイスラーム諸制度を多面的に描いた2，3，4章，現代のイスラーム法体制を踏まえたうえでインドネシアにおける議論の交通整理を行った7章以降は今後とも参照されるであろう。本書はイスラームそのものを対象とする研究のみならず，インドネシアの社会を考察しようとする大半の研究者にとって大変有用なものである。また，植民地支配下の宗教行政や現代におけるイスラーム法の制度化の実態を詳細に描き出した本書は，他地域との比較によってこそ活きてくると思われる。

本書は今後のインドネシアおよび東南アジアのイスラーム研究の基本書となるだろう。それだけに，本書が抱える主として方法論上の重大な問題点を指摘しておくことは評者に課せられた責務であろう。第一に，全体を通して先行研究の扱いが不十分で，本書と先行研究との関係が不明瞭な点である。序章では「方法論を中心に」研究の流れを紹介しているが，スヌック・フルフローニェやクリフォード・ギアツに簡単に言及したあと，1970年代末までイスラームを「動態的に把握することができなかった」と一蹴し，いきなり「イスラーム学を重視」した1990年代の研究に飛んでいる。筆者自身が文中で引用しているベンダ［Brenda 1983（1958）］やボーランド［Boland 1982（1971）］，参考文献に挙げているヌール［Noer 1973］などの歴史研究の位置づけはなされておらず，またヘフナー［Hefner 1985, 2000］，ウッドワード［Woodword 1989］，ビーティ［Beatty 1999］などギアツ以降の人類学者の成果は著者の視野には入っていないようである。フルフローニェとギアツがその後どのように読まれ，乗り越えられてきたのかを示すべきだろう。本論中でも，例えばナショナリズム運動のなかにおける近代主義イスラーム諸団体を再評価したヌールの研究に言及せずにウマットの台頭は「民族運動とは別次元で行動していた」（175ページ）と断じている。第8章や第9章でも冒頭で近年の研究動向が紹介されているが，それらの議論と本書がどのような関係にあるのかは明記されていない。

第二に，多言語の資料を踏まえた手堅い研究手法を採りながら，そこから導き出される結論に論理の飛躍が散見される。とくに第1章に大きな問題を感じざるをえない。ジャワにおけるアラビア語使用は重要だが，それだけではいかにアラビア語が「ジャワ人の『知』の重要な構成要素」（56ページ）になり，またインドネシアにおける「イスラーム受容の『深さ』」（58ページ）を測ることはできないだろう。個別の言葉がどのように使われ，それがどのように

イスラーム的であるのかを検討しなければこのような結論は導き出されないはずである。それは「言語の専門家による，より科学的な分析」（57ページ）ではなく，むしろ筆者のようなイスラームの「動態」に迫ろうとする研究者こそが行うべきである。

最後に，本書の出版後に成立したポルノ規制法についてコメントしておきたい。ウラマー評議会が推進の役割を果たしたポルノ規制法は，紆余曲折を経て2008年10月に成立した。著者が執筆時には同法成立の見通しはたっていなかったが，その理由を「社会が受け入れていないことが背景にある」（322ページ）と断じたのは，早計であったというより，むしろ論理の飛躍ではなかっただろうか。法律の成立とその社会的受容は別の問題であるし，そもそも「社会」の具体的検討もなされていない。「教義研究を把握した上で臨地研究を遂行する」（２ページ）手法は本書に存分に活かされているが，それによって社会現象の分析における論証（それが既存のディシプリンの枠内によるものかどうかはともかく）の重要性がいささかも失われるわけではないはずである。

（見市　建・岩手県立大学総合政策学部）

引　用　文　献

Beatty, Andrew. 1999. *Varieties of Javanese Religion: An Anthropological Account.* Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Benda, Harry J. 1983 (1958). *The Crescent and the Rising Sun: Indonesian Islam under the Japanese Occupation, 1942–1945.* Dordrecht: Foris.

Bolond, B.J. 1982 (1971). *The Struggle of Islam in Modern Indonesia.* The Hague: Martinus Nijhoff.

Hefner, Robert W. 2000. *Civil Islam: Muslim and Democratization in Indonesia.* Princeton: Princeton University Press.

Noer, Deliar. 1973. *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900–1942.* East Asian Historical Monographs, Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Woodward, Mark R. 1989. *Islam in Java: Normative Piety and Mysticism in the Sultanate of Yogyakarta.* Tucson: University of Arizona Press.

Teri Shaffer Yamada. *Modern Short Fiction of Southeast Asia: A Literary History.* Ann Arbor: Association for Asian Studies, 2009, x + 358p.

Short fiction is among the most ephemeral categories of literature. It is often published in literary journals, shoestring or avant garde reviews, as well as university journals in small runs that often appear irregularly or lapse entirely. Not only does much short fiction escape collection by the world's librarians, but there must also exist thousands of unpublished Southeast Asian short stories.

This situation impedes scholars from knowing the full range of the printed word in the region. In this way, they miss the thoughts of many social groups, including submerged populations who frequently have no other outlets in print other than short fiction.

There are scarcely any studies of Southeast Asian short fiction. Although the earliest short story from the region appeared in Bangkok in 1874, the genre's first assessment, by Leopoldo Y. Yabes about stories from the Philippines, was written some six decades later.[1)]

Part of the reason is that their narratives explore aspects of life and give voice to points of view often outside the scholarly world. Because they can be written relatively quickly, disaffected persons (assuming they possess sufficient writing skills) could tell stories about minorities, crime, anti-colonial protests, and other aspects of marginalized life that often escape description in print. This has resulted in colonial and post-colonial officials

1) "Pioneering in the Filipino Short Story in English (1925-1940)," *Philippine Short Stories 1925–1940.* Quezon City: University of the Philippines 1997, pp. xix–xxxvii. Yabes had planned for this essay to be part of a series on Filipino writing in English. Although the section on the novel was published, the subsequent parts, including the one on short stories, could not be published due to the outbreak of World War II.